

《論文》

「老い」の可視化と「一人称の死」

— ボーヴォワール『老い』再読 —

佐々木 陽子

「老い」の可視化と「一人称の死」

— ボーヴォワール『老い』再読 —

佐々木 陽子

和文抄録:「老い」から「死」への連なりは、我々の多くが辿ることになる道程である。だが、特殊な場合を除き、若さとは「老い」も「一人称の死」も忘却して生きることのできる特権的時代であり、若者の時間は未来にある。それに対し、老人の時間は過去にある。近年、ボーヴォワールの『老い』の翻訳本が、40年ぶりに新装版として再出版された。本書は、「老い」をめぐる通時的・共時的な先行研究の宝庫であり、民族学、文学、社会学、文化人類学などの知見を用いて「老い」を鳥瞰的に描き出す。老いに付きまとう孤独感や不安は、人間存在の実存的な問いを投げかけつつも、階級などの変数によって「老い」のあり様の差異をも告発する。現代社会における若さの賛美は、裏を返せば「老い」の隠蔽であり、さらには、「一人称の死」の不可視化にも連なる。だからこそ、今「老い」を改めて問い返すことに意味があると考ええる。本稿の「老い」の考察を通じて、その後、棄老物語分析へと繋げていきたい。

キーワード：老い、時間、容貌、若さ、死

I 本稿の問題意識

「老い」から「死」への連なりは、特別の場合¹⁾を除いて、我々の多くが辿ることになる道程である。だが、健康に恵まれた若者にとって、この道程は自分とは無縁なものに思われよう。若さとは老いること、そしてその先に「一人称の死」²⁾があることを忘却して生きることのできる特権的時代といえよう。老いと死が決定的に異なるのは、「老い」は経験、殊に身体的経験として語りえても、「一人称の死」は語りえないという点である。というのは、死を経験として語る主体が死と共に消滅するからである。死の「絶対不可知性」とはまさしくこのことであろう。

ボーヴォワール (Simone de Beauvoir: 1908–1986) の『老い』が1972年に日本で翻訳出版されてから40年あまりの歳月が流れるが、近年、本書は新装版として再出版された。本書に着目するのは、筆者が数年前より追いかけている「老いと死をめぐる問題群」の下位テーマである「棄老物語」にとって「老い」の考察が不可欠であるからである。本書は、「老い」をめぐる通時的・共時的な膨大な先行研究の宝庫であり、上巻下巻合わせて700頁にも及び、民族学、医学、文学、科学、社会学、文化人類学などの知見を用いて「老い」の全体像を多角的・鳥瞰的に描き出そうとしている。本書『老い』の特色は、1つは、文学的想像力などに触発され、時空を超えて「老い」を人間存在の根元的関わりから捉えようとし、いま1つは時空の縛りを社会的背景と捉え、例えば階級を変数に「老い」の考察を試みていることにある。本書に登場する哲学者・小説家・戯曲家・音楽

家・画家・彫刻家・科学者・政治家等々の数は驚くべきことに500名を越す。ボーヴォワールは自分のあげる例が、「主として恵まれた階層の人びとによって提供されていること」に自覚的で、「そうした人びとだけが自分の経験について述べる閑暇と手段をもちえたからである」(Beauvoir1970=2013:7下巻)、と記している。ボーヴォワールの碩学ぶりが、日本の棄老物語の代表作である深沢七郎の『楢山節考』³⁾にもふれ(Beauvoir1970=2013:64-65, 92上巻)、さらには、老人性愛をテーマとした箇所では、谷崎潤一郎の『鍵』や『瘋癲老人日記』まで取り上げていることから(Beauvoir1970=2013:74-76下巻)うかがえる。「老人の人間性を損なうような社会制度の劣悪さを強調」し、「社会のシステム全体を断罪」するなど(山田2005:9)、個別的個人的な老いを取り上げるのみならず、老いの社会的状況によって生み出される側面を告発する本書の視点も指摘されている(松田2010; 立川2014など)。

本稿では、ボーヴォワールの『老い』に依拠し、「老い」と「死」をめぐる経験と想像力、両者の連続性と断絶といったアンビバレントな関係性を考えたいとの思いがある。また、「老い」を考察対象とするのは、上記で触れたように棄老物語をめぐるジェンダー分析⁴⁾や映像分析⁵⁾へと繋げていきたいからである。別稿で扱う予定の3つの棄老物語(深沢七郎の『楢山節考』[1964年初版]、村田喜代子の『蕨野行』[1998年初版]、佐藤友也の『デンデラ』[2011年初版])は、文学的想像力が生みだしたもので、男女共に60歳あるいは70歳など一定の年齢⁶⁾に達すれば村から棄てられる話である。棄老研究というと、民俗学が日本では浮かぶであろうが、民俗学は棄老習俗と葬制との混同⁷⁾を説くとの立場をとっており、棄老習俗は実在しなかったとしている(大島2001; 関1966; 柳田1998など)。

老齢になれば、シミができ皺がより白髪が増え容色が衰えるとともに、体力が弱るのが当然だが、今日、老いを忌避しようとする動きが、メディアに溢れている。テレビや新聞のCMを見れば、どうしてこれほどまでに、若さを保つことを謳い文句にした健康や美容の宣伝があふれているのであろうかと考えさせられる。見かけより若く見せるために、多様な化粧品、洗髪用品・洗顔用品、栄養剤などが登場し、豆乳・ヨーグルト・黒酢・コウジ酢・ハチノコ・大麦若葉・ブルーベリー・・・こうしたものに含まれる養分が若さや健康を保つ秘訣であり、服用することではりのある肌に変身できるなどと宣伝されている。「見た目年齢」「皮膚年齢」「口元年齢」「骨ケア」といった言葉が踊っている。これらは若さの賛美であり、裏を返せば「老い」の隠蔽でもある。現代社会における「老い」の忌避の情報発信の過剰さは、老いに連なる「一人称の死」の忌避や否定をも意味しよう。こうした現代社会だからこそ、「老い」を考えてみることに意味があると筆者は考える。

Ⅱ ボーヴォワールの『老い』

Ⅱ. 1 本書の概要

本書は、古代ギリシャ・ローマ時代、中世、近代を経て現代までを射程に収め、その時代の思想書・歴史書・医学書・戯曲・詩歌などの文学、音楽や絵画や彫刻などの美術、さらには未開社会に関する文化人類学の知見を使って「老い」を考察している。本章での小見出し(括弧付き)は、筆者の問題意識に沿ってつけたものである。

表1 ボーヴォワール『老い』上巻と下巻の目次紹介

『老い 上巻』 La Vieillesse	書 名	『老い 下巻』 La Vieillesse
シモーヌ・ド・ボーヴォワール Simone de Beauvoir	著 者	シモーヌ・ド・ボーヴォワール Simone de Beauvoir
朝吹三吉	翻訳者	朝吹三吉
2013年 (322頁)	発行年 (頁数)	2013年 (380頁)
序 はじめに 第1部 外部からの視点 第1章 生物学からみた老い 第2章 未開社会における老い 第3章 歴史社会における老い 第4章 現代社会における老い	目 次	第2部 世界 = 内 = 存在 第5章 老いの発見と受容 第6章 時間、活動、歴史 第7章 老いと日常生活 第8章 いくつかの老年の例 結論 付録 I 百歳長寿者 II R・E・バーガー『老人の世話をするのは誰か?』 III 社会主義国における退職労働者の状況 IV 高齢者の性生活に関するいくつかの統計的資料 あとがき 人名索引

Ⅱ. 2 第1部 外からの「老い」

第1部の内容は、「生物学、民族学、歴史、現代の社会学等が老いについてわれわれに教えるところを検討しよう」(Beauvoir1970=2013:16上巻)と要約されている。ボーヴォワールは多岐にわたる学問の知見に依拠し、「老い」の歴史の変容を追いかけてながら、そこに潜む搾取関係にも異議申し立てをする。生物学的視座のみを拡大解釈して普遍化することなく、老いを文化的社会的視点から捉えようとしている。

(老人の遺棄)

最初に生物学的な老い・加齢の分析から入っているが、文化人類学で扱う未開社会における労働力になりえなくなった老人を共同体や家族が捨て置く「遺棄」の多様な事例が主に民族学の知見から記されている。

20世紀初頭まで続いた老人遺棄・撲殺など残酷極まりない慣習が登場するものの、なかには老人に尊敬や愛情を抱き、結婚の際には財産の分配者役であったり、富の所有者の地位にいたりといった事例もあり、こうした場合、子どものうちの誰かが老人の世話をし、特別の居場所を老人に与えられる部族もある(Beauvoir1970=2013:70上巻)。だが、本書には老人を獣同様に扱う事例も多々登場する。シベリア北東部のヤクート族では、老人は家から追い出され物乞いし息子の奴隷となり、時には暴力を振るわれ、労働を強制される生活が報告されている(Beauvoir1970=2013:53-55上巻)。各地で廃物同前に酷い扱いを受ける老人の事例が紹介されているが、移動に際しては殊に老人は邪魔者扱いされる。ポピ族・クロー・インディアン、ブッシュマン族など「村はずれにその目的のために建てられた小屋に老人を連れてゆき、そこにわずかの水と食物を置き、彼を遺棄するのが慣習であった。資源がきわめて心もとないエスキモー^{シキモー}においては、老人たちは雪の上に寝てそこで死を待つように勧められる。(略)多くの社会は、老人たちがまだ頭脳ははっきりしていて身体が頑丈であるかぎりには彼らを尊敬するが、老いぼれて耄碌すると厄介払いをする」(Beauvoir1970=2013:60-61上巻)。20世紀初頭まで続いた慣習もあり、老人の有する呪力が失われたとみなされると、老人は遺棄される。もちろん老人を孤独に放置せず、死にかけている老人を介護する事例もある。たとえば、「歯がぬけたら彼らは赤ん坊に近いとみなされるし、やがて新生児の形で生まれ変わるだろうと考えられる。そのときはじめて彼らは権威を失うが、十分に食べさせてもらい、よい待遇をうけることに変わりはない」(Beauvoir1970=2013:90上巻)、とバリ島の老人に対する習俗が紹介され、未開社会の老人に対する扱いの過度な単純化を戒めている。豊かな社

会より貧しい社会の方が、また、定住民より移動民の方が、老人が生きながらえるチャンスが少ない。共同体の富の集積によっても老人の扱いは異なり、老人の待遇は経済的社会的状況に依拠することを説いている。

（老人の評価の二極化：プラトンとアリストテレス）

貧しい階級には老いの問題は過去に存在しなかった。というのは老人と呼ばれるまで寿命がもたなかったからである。古代ギリシャでは、老衰は災厄とされ、「老齢は大多数の古代都市国家においては資格を付与するものであった。しかし個人に起こる変身としての老いは愛されていなかった」（Beauvoir1970=2013：114上巻）。老いは神格化・知恵者というプラスの価値と、身体的衰えというマイナスの価値の両義性を有し、本書では実に多くの思想家・哲学者を俎上にあげている。

その中で、プラトンとアリストテレスの老いの考察の差異が際立っているのも、ここでは両者をとりあげる⁹⁾。アテネの政治的慣習を厳しく批判したプラトンは、『国家』のなかで「アテネ的民主政を無政府主義と断じ、その平等主義を非難した。アテネの民主政は〔能力にもとづく有資格者の〕^{デモクラシー}権能を十分に尊重していないと彼は考えたのだ。（中略）プラトンが希望する『権能』の統治とは、同時に老人政治なのである。（中略）肉体の欲望と活力が衰えるとしても、魂はそのためにいっそう自由になるであろう」と、「老年への賛辞」を語り、年長者に若年者が服従すべきであると説く（Beauvoir1970=2013：125-127上巻）。それに対し、アリストテレスは、「魂は肉体の形式」と捉え「肉体の凋落は人格全体の凋落を招来する」と説く。『修辞学』の中で青春を「熱意」「情熱」「闊達さ」と、明るい色彩で描き出しているのに対し、老年はその逆に、「臆病」「けち」「エゴイスト」「冷淡」「破廉恥」といったマイナスの形容をしている。そこでは「経験が進歩の要因ではなくて退化のそれであるという考えである」と記される。アリストテレスは、老いに関するこのような考え方から、高齢の人々を権力から遠ざけるべきだと考え、老人を能力の減少した人間と捉える。エリートの老人と大衆の老人の待遇は差異化され、後者については、棄老物語を想起させるような逸話も紹介されている（Beauvoir1970=2013：128-131上巻）。

「古い」の問題では、本書ではキケロを登場させ、高齢化によってむしろ能力が増すことを論証し、醜悪さ、愚鈍さによって排除されがちな「古い」の復権を試みる。「引退」「からだの衰弱」「欲求の低下」「死の接近」の4つを老人が惨めとされる理由としているが、これはいずれも正当ではないとして論破を試みる¹⁰⁾。第1に、老人に機敏さはないが深い思慮がある。第2に、精神をいたわることで、肉体は老いるが心は老いない。第3に、肉体の快楽はなくとも心の快楽はある。第4に、老齢の方が死を恐れず気概に満ち毅然としていると、要約されている（山田2005：3-4）。中世のフォークロアを取り上げている場面では、老婆は「うさんくさい」「不吉な存在」として扱われ、さら老婆は「人食鬼」「邪悪で危険な魔女」とされ、殺害や追放の対象とされた（Beauvoir1970=2013：158上巻）。老爺より老婆が棄老対象にされがちであることがわかる。ボーヴォワールは、老いの悲しみとして老醜や親しいものとの死別体験などを、思想や詩や民話などから引用し展開している。

（呪われた中世の時間と老いと死）

時間のギリシャ名クロノス（Chronos）と神々の中でも最も恐ろしい神であるとされるクロノス（Kronos）との混沌を指摘した学者がいるなかで、「時間について楽天的解釈を行った」者もいた。後者のクロノス（Kronos）は「精神、理性あるいは叡智」「賢明で年老いた建築家」で、「豊饒の象徴」とみなされた。だが、中世になるとこの見方が逆転する。というのは「時間は衰退の原因」とみなされ、時間観が逆転するからである。中世において時間は、原罪ゆえに人間は不幸に運命づけられており、その不幸は時間と共に悪化すると解されていたため、時間は希望と結びつかず、「中世の希望は非時間的なもの」となる。中世以前には「豊饒の象徴」とみなされていたクロノス（Kronos）は、やがて世界を墮落・終末へと導くとされた。老人の主要な関心は、死への準備であり、「いかに死すべきか」に関わる書が書かれた。15世紀に多く描かれた死神の図像は、長柄の鎌と砂時計を持った骸骨である（Beauvoir1970=2013：160-164上巻）。例えば、15世紀のフランスでは、ペシミズムが支配的で、死の観念が「死骸や死肉が世にも厭わしい姿で描かれる。説教師たちは、それらを青春の伴りの

優雅さに対照させる。人間は猶予期間の死者であり、美は外観にすぎない」とされた。人間の身体の内面までもが描き出され、身体を『糞便の袋』と呼んだ者もある（Beauvoir1970=2013：168-169上巻）。ルネッサンス期には肉体の美しさが称揚されるため、「老人の醜さは、そのためいっそう嫌悪すべきものとみなされる。老婆の醜さがこれほど残酷にあばかれたことはなかった」。老婆の肉体の醜悪さを取り上げたエラスムスについては、次のように記されている。「彼は老女の『醜い乳房』について語り、彼女の肉体についてむかつくような描写をする」と（Beauvoir1970=上巻2013:172-173）。その後16世紀以降も老いに対する攻撃的記述があふれる。ルネッサンス期の絵画には、「若返りの泉」のモチーフが登場するが、これは若さへの憧憬の証しであると同時に、この時期、多くの老人の肖像画が描かれ、「裕福で尊敬された老人たちは自分の老いを誇っている」（Beauvoir1970=2013：187上巻）。

（近代以降の老人の処遇の二分化）

19世紀、時代は大きく転換し、プロレタリアートが誕生する。階級抜きに老人の処遇を語ることはできない。特権階級の老人と無産階級の老人の処遇はあまりにも異なる。貧しい階級では老人を養老院に見捨てたり、飢えさせ虐待したり、息子に農地を相続して所有権を失った親の残虐な最期が記されている。「老人がほんとうに死ぬ前に埋葬されることもしばしばある」といった殺人例さえ紹介されている（Beauvoir1970=2013：228上巻）。「かつていかなる作家においても、ヴィクトル・ユーゴーにおけるほど、老いが多くの場所を占め、高く称揚されたことはなかった」とし、ユーゴーは、「世間からの隔離」を強調し、老年の孤独について詳細に論じている。最後に、19世紀の文学において老いは、上層階級に属していた者たちに独占され、生活苦ゆえに長生きできないため、「年老いた労働者」は登場しない。このように階級変数が小説の世界においても影響を及ぼしていると論じる（Beauvoir1970=2013：238-242上巻）。

（現代社会における老い）

「老人は社会からみれば猶予期間中の死者にすぎない。」養老院に入るように勧められ老人が入ると、「老人が衰弱と死に向かって下降するしかなく、無益な、たんなる厄介物にすぎず、人びとが望むことは、できれば彼を端数として片づけること」（Beauvoir1970=2013：253-254上巻）が期待される。人が「六〇歳や六五歳で廃物にならないようにする社会を、人は想像しうる」例として、資本主義国でも福祉レベルが高い北欧のスウェーデンやノルウェーがあげられる（Beauvoir1970=2013：270上巻）。フランスでは老化の年齢は、「坑夫たちは他のすべての職種の者より早く、四六歳と四七歳のあいだで老いる」（Beauvoir1970=2013：266上巻）とある。ボーヴォワールは200人を容れている社会福祉局管理の救済院を訪問した際、絶句する。ほんのわずかな裕福な者は個室があてがわれ、「他の何人かは四つか五つのベッドがある中部屋に住んでいる。しかし大多数の者は共同部屋に詰め込まれ」、押し込まれた空間の中で暮らす人々のうつろな目、無気力さ、悪臭などを体験する。フランスのこうした社会的背景としての貧困な福祉への財政配分のみならず、老人は圧力団体をも形成できず、政治的影響力もなく打ちひしがれた無力者として生きている。さらに、老人の自殺は「心身の衰退、孤独、無為、不適応、不治の病気といった、社会的ならびに心理的要因にほかならない」と指摘する（Beauvoir1970=2013：300・321-322上巻）。

Ⅱ. 3. 第2部 世界=内=存在

2部は、老いの定義は人により異なりながらも、同時に超歴史的現実であり、老いの多様な経験をつきあわせ、その共通性と差異の両方の考察によって、その時代の人間が自分の老いをどう生きるのかの内面の理解を試みようとしている。

（実感されえない体験としての「老い」）

老いを認めたくない我々は、老いを自己と異質なものとみなす。老いと病気の連結をごまかしによって直視

しようとしな。い。「われわれの身体と顔の概観は、より確実にわれわれの年齢を知らせる。われわれが^{はたち}二十歳だったころとなんという相違だろう！ただ、この変化は不断に進行するので、われわれはほとんどそれに気づかない」(Beauvoir1970=2013:13下巻)。自分が自分であること、しかし老いてあまりに風貌が異なったという客観的事実との間の矛盾をサルトルは「実感されていないもの」と呼んでいる。老いは突然襲ってくるような、圧倒的断絶の経験ではない。しかし確実に我々は老いる。鏡の中に「あふれんばかりの輝く美貌を有する老婆」は発見できない。老人の性愛について科学的また文学的素材から多様に論述されている。男性にとって性欲と可視的な身体性の関わりが明確なのに対し、女性の性欲は老いによる打撃を受けない。しかし「歴史も文学も、年取った女性の性愛について確実な証言をわれわれに残していない。この主題は、年取った男性の性愛よりもさらにいっそうタブー視されているのである」(Beauvoir1970=2013:89下巻)などセクシュアリティと老いの問題が展開されている。

(時間を生きること)

生きてあること[実存すること]、それは人間存在にとっては、己れを時間化することである。すなわち、現在において、われわれはわれわれの過去を乗り越える^{くわだて}投企によって未来を志向する、そしてこの過去のなかにわれわれのもろもろの活動は落ち込み、惰性態と化したもろもろの要求を背負ったまま、凝固する。ところで、年齢は時間に対するわれわれの関係を変える。すなわち年月を経るにつれてわれわれの過去は重たくなり、われわれの未来は短くなるのだ。人は老人を次のように定義しようだろう、自分の背後に長い人生をもち、前方にはきわめて限られた存続の希望しかもたない者である、と(Beauvoir1970=2013:103下巻)。

「老い」るほどに、人は自己と関わる死者を彼岸へと送る経験を多くもつことになる。ボーヴォワールは自分の年齢に照らし、時間感覚の不均衡を記している。幼い時の流れゆく時間は、老いてからの時間と異なり、ゆったり流れていたはずであると。時間は、われわれの人生のそれぞれの時期において同じようには流れはしない。老いるほどに早く進む。「限られた未来、凝結した過去、これが年取った人びとの直面する状況なのである。多くの場合、この状況は彼らの活動を無力化する」(Beauvoir1970=2013:124下巻)。かつて老人の経験や人生知は貴重なものとして扱われ、過ぎ去った時間は現在の時間に包摂され失敗さえも未来を作り出すとの楽観論に時間は捉えられていた。だが「経験という概念は、それが積極的な習得に関するかぎりにおいてのみ価値がある」にすぎない。また異なる経験もある。すなわち「老いている者しかもてない経験がある、すなわち、老いそれ自体の経験である。若い人びとは老いについて漠然とした、そして間違った概念しかもたない」(Beauvoir1970=2013:127・128下巻)。

(「老い」と「想像力」と「豊饒」)

「作家はどのように老いるのであろうか？」との問いについて、ユーゴーのような特例があるにしても、「一般には高齢は文学的創造にとって好適ではない」としている。トルストイなどの例をあげて、「中年期の所産と晩年期の所産とのあいだの対照は圧倒的に前者が優勢である」と(Beauvoir1970=2013:147下巻)。「私の生きられた経験(体験)はどのようにして他人のそれとなりうるのだろうか？ただ一つの方法、すなわち、想像力の仲介によってである。」作家は伝えたい何かがあって、想像という手段に訴えるのではなく、「想像界の選択^{はじめ}ということが源泉にあり、それが彼の天職を決定するのだ」。ここでは数多くの作家の事例を提示し、「老い」「想像力」「体験」などをキーワードに、芸術家が老いても「豊饒」を生み出せると思いがちなことが指摘されている。たとえばルソーの『孤独者の散歩』を引き合いにだし、彼が「悲しくも彼の想像力の衰退」を認めざるをえなかったこと、夢想から生まれるものが「創造ではなく追憶」に変化していることを語っている(Beauvoir1970=2013:148-150下巻)。だが、情熱を持ち続ける者もいる。「自分の有限性を知り、それを引き受けながら自分を乗り越えようとするにまだ喜びを見いだすことでもあるのだ。そこには芸術の、思想の価値の

生きられた肯定があり、それは人に讃嘆の念をおこさせる」(Beauvoir1970=2013:160下巻)。

(「老い」に接続する死の本質)

老人にとって死は一般論・抽象論ではなく、「彼個人に関わる出来事」なのである。自分の死は「私のもろもろの可能事の外側の境界であり、私自身の可能事ではない。ある日、私は他者たちにとって死んでいるだろうが、私にとって死んでいはいはしないだろう。すなわち、私の存在のなかで死ぬべきものは私自身ではなく他者なのである。(中略)私の『死ぬべき性質』はいかなる内的経験の対象ともならない」(Beauvoir1970=2013:195-196下巻)。ボーヴォワールは言う。「死という考えが私を以前ほど悲しませない(中略)死とは、世界における不在、である。そして私が諦めの気持ちをもって甘受できなかったのはこの不在ということであった」と(Beauvoir1970=2013:199-200下巻)。安らかに死んでいったボーヴォワールの祖母、そして「動物的な恐怖」さえ抱いて死んでいった母¹¹⁾を想起する。「死が人を陰気にするのではなく、むしろ、現在が陰惨に思われるとき死がその脅威的不条理性において開示される、ということであろう」と(Beauvoir1970=2013:201-202下巻)。

(老いと時間観)

老いれば物忘れが激しくなる。が、「若いころも、人はすべてをいつまでも覚えていると考えるわけではない、しかし無限の未来を所有しているので人は時間からまぬがれている。私が、瞬間のなかに永遠を捉えたと思ったとき、それは息がとまるほどの感激を私にあたえた。それは永久に消え去りえないものであった。しかし未来が塞がれてからは瞬間はもはや永遠とは感じられず、もはや私に絶対をあたえてはくれない」(Beauvoir1970=2013:207下巻)、とボーヴォワールが書いている。老人のマイナスイメージは、毫碌、感情爆発、無気力、失禁など数限りなくあげられる。身体的精神的老化現象があらわになる現実とは逆に、古代以来「老人たちがあらゆる痛苦にうちひしがれていることを知っているにもかかわらず、老人たちは幸福なのだと考える」ことを教えてきたと指摘し、「老いが心の明澄をもたらす」ことを偏見と指摘する(Beauvoir1970=2013:248下巻)。職業から自由となり社会的役割に縛られることなく「私が私でいられること」によって自由を獲得すると考えられる老人もいようが、虚無や孤独や無為に苦しめられる老人も存在する。精神障害者が老人に多いことは、本書でも繰り返し述べられている(Beauvoir1970=2013:251、257下巻)。ボーヴォワールは「老人を虐待する文明のやり方を何ページにもわたり告発」する意思があった、とSerre-Monteil(1999=2005:238)は記している。

(結論)

老いによって、人間は行動も思考も低下する。ボーヴォワールは「生に対比さるべきものは、死よりも老い」と捉え、この意味で死より「老い」に対し嫌悪の感情を抱くと言う。というのは、「死は人生を運命に変え、死の持つ絶対の次元は「ある意味で人生を救う」。つまり死は時間のない世界であり、時間を放棄するのだから(Beauvoir1970=2013:311下巻)。貧富の差により、老いの始まる年齢は異なり、階級変数によって肉体的精神的悲惨さが差異化される。「搾取され、自己疎外された人びとは、体力がなくなると、必然的に『廃品』となり『屑』となるのだ」と語り、人生の最期を孤独のうちに迎える人々の存在と社会の関係を詰問する¹²⁾。老いをどう生きるか、老人の境遇、つまり惨めで孤独で廃物としての存在として残された時間を過ごすか否かは、社会のあり方、具体的には老人対策が問われているのであることを指摘する(Beauvoir1970=2013:313-316下巻)。

Ⅲ 「二人称の死」の乗り越えとボーヴォワール自らの老い

サルトル(Jean-Paul Sartre 1905-1980)は、アグレガシオン(1級教員資格・哲学)試験に首席で合格し、同試験の第2位で合格したボーヴォワールと知り合い、2年間の契約結婚を結び、その後も2人の間に自由恋愛

の関係が続いたことはよく知られている。2人の赤裸々な性的自由な関係が『別れの儀式』の後半に綴られた「サルトルとの対話」(Beauvoir1981=2000)に登場する。隠し事をしないことで関係を築いていた2人が、それぞれ最初の性的関係をどう持ったか、その後どれだけの女性とサルトルが性的関係を持ったかなど、質問するボーヴォワールにサルトルは詳細に答えている。サルトルの葬儀で、遺体がモンパルナス墓地に埋葬される場面で、椅子に腰かけたままのボーヴォワールが悲しげに埋葬を眺めている(図2)。そこには老いたボーヴォワールがたたずんでいる。若く美しかった彼女は老婆と化している。サルトルを失った同年、アメリカで愛人関係にあり求婚までされたネルソン・オングレンを失い、この男性こそがボーヴォワールに性の喜びを伝えてくれたと彼女は告白している(Serre-Monteil 1999=2005: 309, 311)。

ボーヴォワールにとって、母とサルトルの身近な二人称の死の経験¹³⁾が、彼女の中に刻印されていると言えよう。1つは、実母の死である。ボーヴォワールは母の死をみとったがこの経験は『おだやかな死』に綴られている。ボーヴォワールの母は、生きていたいと切願し、死ぬのが怖いと言う。だが、癌におかされ、鼻はとんがり目が引きつり口を開きあえいでいる。手術室に移された母は「腹腔から二リットルの膿。腹膜破裂だ。巨大な腫瘍、最悪性の癌。外科医がとれるだけのものを取り除いている最中である」(Beauvoir1964=2010: 39-40)、とある。手術の終わるのを待ち、そののちもモルヒネで痛みは抑えられるものの、癌は体中に転移している。母の死の孤独、母の生の孤独、娘のボーヴォワールは母の苦しみを思う。熱心なキリスト教徒に思われた母は、臨終においても司祭を呼ぶことを求めなかった。「誰か愛する者が死ぬと、私たちは胸を刺す無数の悔恨を支払って生き残る罪をつぐなう。そのひとの死はそれがかけがえのないただひとつの存在であったことを私たちにあかす」(Beauvoir1964=2010: 139)、これは「二人称の死」を要約してくれている。一方では「瞳孔の拓いた、くわっと見開いた母の目にたたえられた恐怖」、他方では、「事実比較的に言って、母の死はおだやかだった」「母はいともおだやかな死を通過した。めぐまれたものの死を」(Beauvoir1964=1995: 140, 141)と記す。

いま1つは、『別れの儀式』に綴られている盟友サルトルの死である。老いるということは、その先に一人称の死があるのみならず、情愛の対象との死別を次から次へと経験することを意味しよう。サルトルとボーヴォワールの関係は人口に膾炙されており、当時としては結婚しない契約による男女関係は極めてまれであろう¹⁴⁾。サルトルが失明をはじめ多様な障がいを負って老いた姿で病床に臥せるのを目の当たりにするのは、ボーヴォワールにとってどれほどの苦悩であったであろう。サルトルの柩が5万人もの民衆の熱狂に包まれモンパルナス墓地にやっとの思いで到着したとき、掘られた穴にサルトルの柩が入れられ土がかけられていく。年老いたボーヴォワールは悲しみをたたえた表情で、埋葬場所近くに立っていることが困難なためか用意された椅子に腰かけ、盟友サルトルの埋葬を見守る。今にも泣きだしそうな顔が写真から見て取れる。右の図1はサルトルと共に写ったボーヴォワール38歳の写真であり、図2は、ボーヴォワール72歳で、サルトルの埋葬に立ち会った写真である。図2には「サルトルの埋葬にて泣き崩れるボーヴォワール」との見出しがつけられている。

鈴木は『別れの儀式』の書評の中で、「サルトルの肉体が決定的に老化し、頭も血管もぼろぼろになっている」状態を見守り、突き放した筆でサルトルの死を描き出しながらも深い愛情を感じさせるとし、「ボーヴォワールのしぼとさに感嘆」との小見出しをつけている(鈴木1984: 75)。



図1 (上) サルトルと39歳のボーヴォワール

図2 (下) 埋葬に立ち会う72歳のボーヴォワール

出所: Serre-Monteil 1999=2005口絵

IV 老いの可視化

老いは想像力としてではなく経験としてやってくる。想像力としての「老い」と経験としての「老い」の断絶は大きい。若者にとっての「老い」は我が身のこととしての逼迫感はなく、あくまでも想像の中で膨らませることの可能な空想の世界の問題であろう。目の前の老人を見て、「いつか自分もあなるのだろうか」と疑問形で思う余裕が存在している。体力の絶頂期が終わり少しずつ下降していくことを、本人が気づいた時には、もしかしたら「老い」の渦中にいるのかもしれない。



図3 「18歳のBB」



図4 「18歳のBB」



図5 「53歳のBB」



図6 「捕鯨反対表明のBB77歳」

出所：〈図3～5〉Vincendeau (2014: 14, 35, 89) 〈図6〉「ブリジット・バルドー、野田総理に捕鯨反対の抗議文」2011年11月15日（ライブドアニュース2015年7月19日アクセス、写真：KCS/アフロ）
http://news.livedoor.com/article/image_detail/6030115/?img_id=2319094

＊ここでは、ブリジット・バルドーは、BB (bebe) が愛称とされたので、表記はBBに統一。図5については、次のような言葉が写真の傍らに記されている。「私は、私の若さと美を男たちに与えて来たけれども、これからは私の知恵と経験を動物に捧げていく」Vincendeau (2014: 89)。動物愛護運動家らしき言葉である。

一世を風靡し、ミニスカートで美脚をあらわにしていた仏のセックスシンボルの大女優であり、「フランスのマリリン・モンロー」と呼ばれたブリジット・バルドー (Brigitte Bardot, 1934年～) は、その若さと愛らしさと美しさは、老いて変わり果てた姿となった。上記の写真に示された美醜の断絶はどんな精神論を提示してもきれいごとにならず、断絶を覆い隠すことはできない。彼女はSinger (2006) やVincendeau (2014) の中で若き頃と老いた自分の写真を掲載し、老いを隠さず露呈させているが、マーブルブックス 編 (2013) では若くて美しかった頃のみが掲載されている。

オウィディウス¹⁵⁾は、『悲しむ人たち』のなかで、憂愁さによって少し和らいだ残酷な口調で、愛する女の未来の顔を描きだす。彼はペリルラに言う、「この魅惑的な顔も年月の経過とともに変わるだろう。この額も時間^{とき}に害われ皺^{しわ}がきざまれるだろう。この美しさは、一步一步音もなく進みくる無情な老いのとりことなるだろう。彼女は美しかったと人は言うだろう。そしておまえは悲嘆にくれ、おまえの鏡を不実だと責めるだろう。

(Beauvoir1970=2010: 142上巻)

2014年11月12日と立て続けに『キネマ旬報』に、外国及び日本の好きな男優女優が、映画人・文化人・評論家など合計186名の投票によるランクづけがなされ、その結果が掲載された。

まだ老齢にならずして引退したり、若死にや事故死などのため、若かりし頃と老齢になってからの両方の写真を手に入れるのが困難なケースがある中で、外国人男優1位のクリント・イーストウッド (Clint Eastwood, 1930年～: 図11～図14) と女優1位のオードリー・ヘップバーン (Audrey Hepburn, 1929年～1993年: 図7～図10) については、若い頃と老いてからの両方の写真を手に入れることができた¹⁶⁾。イーストウッドについては、Douhaire

(2010)、Duncan (2006)、Girgus (2014)、Verlhac (2008) など、写真を主とするもののほか映画紹介、彼自身の伝記を交えたものなどがあるが、このいずれも老いた姿をさらしている。とりわけ、Verlhac (2008) では老いの証拠ともいえる皺を接写させている写真が際立っている。イーストウッドが老齢に入って高く評価される作品を撮っており、老いが映画作品にとって重要なテーマに位置づけられるため、単純比較はできないが、老いた姿をさらけ出すことに、男性の方が抵抗感がなく、時にはそれが「渋さのある男優」として称揚される可能性もあろう。



図7 ヘップバーン23歳
『ローマの休日』



図8 25歳



図9 62歳



図10 UNICEF大使
アフリカにて77歳

出所：〈図7と図10〉Erwin and J. (2006 : 73, 179) 〈図8と図9〉Krenz (1997 : 9, 89)

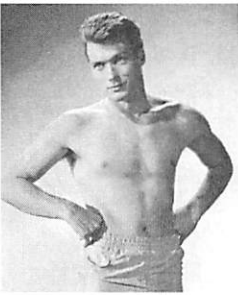


図11 24歳のイーストウッド



図12 25歳

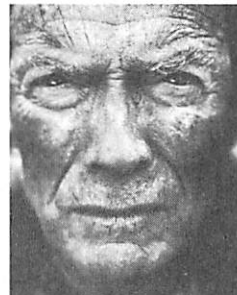


図13 72歳

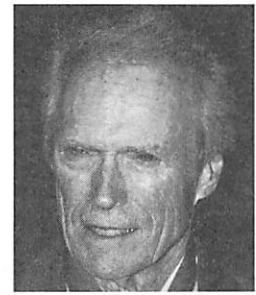


図14 79歳で仏レジオンドヌール勲章授与

出所：〈図11・12・13〉Verlhac (2008 : 22, 14, 165) 〈図14〉Douhaire (2010 : 197)

図13の写真にはwrinkled portraits (2008:163) と説明書きがあり、あえて皺のある顔面を接写させている。説明書きは写真の前の頁に掲載されている。

オードリー・ヘップバーンについては、若かりし美貌を誇るもののみで写真を構成しているEditors of Life (2008) があるものの、UNICEF大使として老いてアフリカでの活動をそのまま掲載しているものにDherbier (2014)、Erwin and J. (2006)、Krenz (1997) などがある。顔の体験は「恋愛」と「古い」にあり、これを忘れ「心理の問題に還元されてしまうなら、そのとき『恋愛』と『古い』はたちまち貧しい抽象へと堕してしまう」(松浦1993 : 76)。この指摘を読んだとき、あえて接写させてまで皺をイーストウッドが撮らせたことの意味の一端が分かったように思われた。イーストウッドは近年役者のみならず映画監督としても活躍し、2度にわたりアカデミー賞を受賞¹⁷⁾している。また、ヘップバーンは1987年NICEF親善大使に就任し翌年1988年エチオピアを訪問し、飢えのために死にゆく子どもたちに会い、「アフリカにおけるできる限りの命を救おうと人類愛の使命に彼女は持てる力の限りを注いだ」(Dherbier 2014 : 181) とあり、その活動では化粧もせずに老いの姿もさらけ出している。

V. 結語

老いることで風貌は別人のように劣化するものの、キケロは「老い」によって得られる知の深化と結びつけ「老い」をオプティミスティックに捉え、「惨めな老い像」を否定する。「老い」を肯定的に捉えるキケロは、さまざまな形で引用されているが（Beauvoir1970＝2013上巻；Minois1987；松井2008；山田2005；など）、「老い」が人生の黄昏であることには違いない。「老い」を以下の3つの視点から提示し、本稿を閉じたい。

第1に、「老い」は、ボーヴォワールが指摘するように、階級・階層という変数によってその状況は著しく異なる。老人施設を訪問したボーヴォワールがあまりの落差に驚きを隠せなかったように、「老い」をどのように過ごすかは、その経済力によって異なり、格差の有り様を映し出している。雑居牢といってもおおげさではない、大部屋に所狭しとばかりに並べられたベッドに横たわる無気力に映る老人たちに向かって、残された時間に希望を抱けと言うのは欺瞞であろう。それ以前に、経済変数は寿命にも影響し、まともな病院にかかり適切な医療処置を受けられるか否かで寿命は異なる。鉦夫の寿命のあまりの短さは、こうした肉体労働にのしかかっている過酷さを想起させる。「老い」は、この意味で階級・階層やそれに連結する経済的要素といったものに規定されるゆえに、福祉政策が重要課題であることはいうまでもない。老人が廃人として扱われるか否か、また自己尊厳感情を肯定的に持てるか否かなど、老人の自殺率にも連動するため、行政の施策の重要性ははかりしれない。

第2に、「老い」を回避できないことからくる、孤独感や不安は、人間存在の実存的な問いかけであろう。この私が老いていくという「個性」と私同様に誰もが老いを避けられないという「普遍性」の交錯を乗り越えて、死に至るという人間の老いから死への連結は、人生の黄昏をどう位置づけるかが問われている。黄昏は見ている者にはこの上なく美しく、迫りくる夕闇もまたその陰翳に息詰るほど見とれることがあろう。しかしこの視点は、黄昏の外にいる人間、とりわけ若者の視点と言えよう。黄昏の中にはまり込まざるを得ない人間にとって、闇の接近は恐怖であり不安であり、死の予感かもしれないのだから。この実存的問い、答えなき問いを問い続けるしか生きるすべはないのであろう。

第3に、老いと時間をめぐる問題は難題である。老いるにつれ時間の流れが速まるのは、時間の主観性を語っていよう。また、時間が円環ではなく直線的時間軸でイメージされる限り、先端には死があり、死をもってその人の時間は終わる。進化論的あるいは進歩観的直線的時間観念は、一見未来に希望を抱かせるオプティミスティックな思いをもたらすといえよう。だが、実は直線の先端に待ち伏せしているのは死に他ならない。人間のライフサイクルの時間軸を直線で描くと、単純な進歩観には合致しない。中ほどから下り坂へと向かうからである。時間と共に成熟していくのは人生の限られた前半部にすぎない。「老いは結局は自分自身のものである。それゆえ、老いの倫理は基礎的には人間において問われ続けたはずである」「近現代の人々にとって、『人』はまったくの物かデータか、そして死者はまったく『ない』もののようだ。老人は、その『ない』ところにもうすぐ行く人である」（黒住2008:81-82）。「ない」ものとなる空しさの一方で、生きている限り、人間としての倫理が問われることに、経験の蓄積者として老人を見る視点が見えてくるように思われよう。人生の重みとして「老い」を受容する時、黄昏が人生の終焉になぞらえることは否定できないが、次の言葉の意味を考え続けたい。

黄昏に飛び立つミネルヴァのフクロウのごとく、夕暮れにおいて見出される経験と記憶。そこに自分の人生をめぐると何かの思い出があり、哲学的な把握さえあるかもしれない。まだ死なぬ限り、そこから何程か「次の生活」があるだろう（黒住2008:83）。

註

- 1) トルストイの『イワン・イリッチの死』の主人公は、45歳の控訴院の判事であるが、不治の病におかされる。自らが死ぬことを悟った彼は絶望に駆られ、モルヒネを打つことで痛みに耐え、自力で身体さえ動かさず召使いの世話になる。「神の残酷さ」「神の不在」に怒りをぶつけても答えは返ってこない。死に至る人間の焦りや憤懣や恐怖や孤独が、文学的想像力によって描き出されている。だが、死の直前、あれほど自分を苦しめた死の恐怖は消え失せ、光がさすなかで、主人公は、自己の死を受け入れ息を引き取る。老齢に達せずに死に至る事例が描き出されている。
- 2) 第三人称が平靜の原理なら、第一人称は疑いもなく苦悶の源泉であり、第二人称の死すなわち「親しい存在の死は、ほとんどわれわれの死のようなもの、われわれの死とほとんど同じだけ胸を引き裂くものだ」(Jankélévitch1966=1978: 25、29傍点は著者)との指摘のように、死は「人称」を潜伏させているため、通常、自分とは無関係な「三人称の死」に平然としていられるが、「二人称の死」や「一人称の死」に直面すると、衝撃を受け悲嘆のあまり絶望に落ち込むことは想像に難くない。
- 3) 原ひろ子は、棄老を受容できない又やんのような人間類型が代表的なのではと記すボーヴォワールの見解に触れ、「ヘアー・インディアンの中にもまたやんのように生に執着する人々がいたかもしれないが、(略)たやすく死を受容するように見えるヘアー・インディアンとつきあっていると、そうすぐにボーヴォワールの現代人的な視点からのみの解釈に屈服することはできない」としている(原1997: 68)。
- 4) 棄老は姥捨てあるいは姥捨と呼ばれる。「ウバ」は母に代わって乳を飲ませる女性という狭い意味でなく、本来敬意の対象となりうる年配女性を意味した。「オバ」はかつて家の傍系成員の女性の呼び名とされていた(福田・新谷ほか編1999: 174、258)。また、「をばすて」はもともと墓所の「をはつせ」が転じたものとされている(大島2001: 4)。柳田(1998)は各地の親棄ての昔話を四類型に分類しているが、棄てられるのが老婆である話は外来ものではなく、日本の独自性が強いと指摘している。宮田も次のように記している。「母親としての老女のイメージが印象深く語られているのが、親棄山の日本の展開なのです」と(宮田1988: 132)。
- 5) 『楳嶺節考』は木下恵介監督(1958年)により、四半世紀して、今村昌平監督(1983年)により映画化されている。『炭野行』は恩地日出夫監督(2003年)、『デンデラ』は天願大介監督(2011年)により、それぞれ映画化されている。
- 6) 『楳嶺節考』と『デンデラ』では70歳、『炭野行』では60歳が棄老の年齢である。
- 7) たとえば、両墓制や風葬といった葬制との混同が指摘されている。遺体を埋めた「埋め墓」と、遺体はないが死者の霊を祀る「詣り墓」の2つの墓をもつ両墓制において、遺体を穢れとみなすために集落から遠く離れた谷や海辺に「埋め墓」がつくられ、遺体は崖や洞窟などに晒されたとされている。また、遺体の風化を待つ風葬は、奄美大島や沖縄などの南国にみられる。遺体が晒されるため、遺体の遺棄と捉えられやすいことが指摘されている。例えば、奄美大島本島の岩窟などに人骨を納める「イャンヤ」に、風葬の面影を見出しうるが、信濃の姥捨て山伝説も、風葬の名残ととらえることができるとの指摘もある(金久1978: 164)。
- 8) エスキモーの老婆の棄老の話(Wallis1993=1995)はアラスカエスキモーの集団から掟によって棄てられた2人の老婆が、寒さと苦境を生き抜く伝説物語である。同じく北アラスカのイヌイットは老人に敬意をもち生活するものの、老人が共に集団行動ができなくなると浮氷の上に置き去りにするとある。シベリアの北方民族における同様の例も紹介されている(Minois1987=1996: 16)。
- 9) 原(1997: 78-79)は、ボーヴォワールの「老い」からイヌイットの棄老の実態を紹介したのち、プラトンとアリストテレスを対比させ、前者を進化派、後者を凋落派と単純化することを批判し、我々の抱く老いに対する矛盾に満ちた感情を解決しないとしている。
- 10) この問いに対しMinois(1987=1996: 141-148)では、詳細に論じられている。
- 11) 「おだやかな死」の中で母の死が取り上げられている。前原は「おだやか」の意味を、母親が変質しながらも、「かつてそうであったように母親らしくありつづけることができたことであり、また、恐れるがゆえに『死』を直視することなく、母親の過去から現在における選択がみつめられ、かけがえのないただひとつの存在でありながら娘と最期を過ごせたことではなかったか」(前原2013: 78)と記している。
- 12) 年老いた人々の状態をスキャンダラスと捉え、老人虐待の有り様を告発するものとして「老い」を明確に位置付けている(Serre-Monteil 1999=2005: 238)。
- 13) ここでは、母とサルトルの2人を取り上げているが、20歳そこそこで、ザザという親友の死もまた、ボーヴォワールにとってかけがえのない死別体験であった。ザザは脳膜炎で若くして亡くなっている(Serre-Monteil 1999=2005: 58)。
- 14) ボーヴォワールとサルトルの出会いから自由な恋愛関係について契約を交わすなど、また契約の内容など詳細については『世紀の恋人: ボーヴォワールとサルトル』から知ることができる。サルトルの多くの若い愛人との関係はかなり知られているが、ボーヴォワールもアメリカ人作家でピューリッツァー賞を受賞したネルソン・オルグレンから求婚される関係にあった。サルトルの元に戻ることでこの恋愛には終止符を打たれる。また、ボーヴォワールと20歳近い年若い青年で後にホロコーストを扱ったドキュメンタリー映画『ショーア』で有名なクロード・ランズマンとも同棲し恋人関係になっている(Serre-Monteil 1999=2005)。
- 15) 紀元前後にあたる時期に生きた恋愛詩などを書いた古代ローマ時代の詩人。
- 16) 「映画人・文化人・評論家が選ぶ私の好きな外国人男優・女優ベスト5」とあり、5位までは以下のとおりである。日本の男優女優では老人になってからの写真の入手が困難であったり、現段階で老いたとは言えない人などで外国人男優女優にした。

順位	男優	投票数	女優	投票数
1位	クリント・イーストウッド	38	オードリー・ヘップバーン	27
2位	スティーブ・マックイーン	19	ジーナ・ローランズ	24
3位	アル・パチーノ	18	ジャンヌ・モロー	23
4位	ロバート・デ・ニーロ	16	キャサリン・ヘップバーン	19
5位	ポール・ニューマン	15	ケイト・ブランシェット	16

- 17) 1992年、『許されざる者』を監督兼主演し、第65回アカデミー賞監督賞、作品賞を受賞している。2004年の『ミリオンダラー・ベイビー』では、74歳で2度目のアカデミー作品賞・アカデミー監督賞のダブル受賞をしている。

引用文献

- Beauvoir, Simone de, 1964, *Une mort très douce*, Paris: Gallimard. (= 1995 杉捷夫訳『おだやかな死』紀伊國屋書店.)
- Beauvoir, Simone de, 1970, *La vieillesse*, Paris: Gallimard. (= 2013 朝吹三吉訳『老い上巻』人文書院.)
- Beauvoir, Simone de, 1970, *La vieillesse*, Paris: Gallimard. (= 2013 朝吹三吉訳『老い下巻』人文書院.)
- Beauvoir, Simone de, 1981, *La cérémonie des adieux*, Paris: Gallimard. (= 2000 二宮フサ・朝吹三吉・海老坂武訳『別れの儀式』人文書院.)
- Dherbier, Yann-Brice, 2014, *Audrey Hepburn: A Life in Pictures*, London: Pavillion Books.
- Douhaire, Samuel, 2010, *100 Photos Pour Comprendre Clint Eastwood*, Paris: l'Éiteur.
- Duncan, Poul, 2006, *Movie Icons Eastwood*, Los Angeles: Taschen America LLC.
- Editors of Life, 2008, *Life: Remembering Audrey*, New York: Time Home Entertainment Inc..
- Erwin, Ellen and J. Diamond, 2006, *The Audrey Hepburn Treasures*, New York: Atria Books.
- 深沢七郎, 1987, 『楳嶺節考』新潮社.
- 福田アジオ・新谷尚紀ほか編, 1999, 『日本民俗大辞典上』吉川弘文館.
- Girgus, Sam B., 2014, *Clint Eastwood's America*, Cambridge: Polity.
- 原ひろ子, 1997, 「文化にとっての老い—新しい異世代共存」井上俊・上野千鶴子ほか編『岩波講座現代社会学13 成熟と老いの社会学』岩波書店, 61-73.
- Jankélévitch, Vladimir, 1966, *La Mort*, Paris: Flammarion. (= 1978 仲沢紀雄 (訳)『死』みすず書房.)
- 金久正, 1978, 『奄美に生きる日本古代文化 増補版』至言社.
- 『キネマ旬報ムック』, 2014, 「オールタイム・ベスト映画遺産 外国映画男優・女優100・11月号」キネマ旬報社.
- 『キネマ旬報ムック』, 2014, 「オールタイム・ベスト映画遺産 日本映画男優・女優100・12月号」キネマ旬報社.
- Krenz, Carol, 1997, *Audrey Hepburn: A Life in Pictures*, New York: Metro Books.
- 黒住真, 2008, 「『老い』について—倫理思想史からの問い」『倫理學年報』57: 79-96.
- マーブルブックス 編, 2013, *Love! BRIGITTE BARDOT — perfect style of B.*, メディアパル.
- 前原なおみ, 2013, 「『おだやかな死』を再考する」『メタフェシカ』44: 67-80.
- 松田幸子, 2010, 「老年の価値」『上田女子短期大学紀要』33, 95-104.
- 松井富美男, 2008, 「老いの研究: 生命倫理の観点からの老い像を求めて」『広島大学大学院文学研究科論集』68: 1-14.
- 松浦寿輝, 1993, 「『顔』と『距離』の葛藤—『許されざる者』をめぐる』『ユリイカ』25 (8) 74-85.
- Minois, Georges, 1987, *Histoire de la vieillesse en occident: de l'Antiquité à la Renaissance*, Paris: Fayard. (= 1996 大野朗子・菅原恵美子訳『老いの歴史—古代からルネサンスまで』筑摩書房.)
- 宮田登, 1988, 『靈魂の民俗学』日本エディタースクール出版部.
- 村田喜代子, 1998, 『巖野行』文藝春秋.
- 大島建彦, 2001, 「姥捨ての伝承〔含姥捨て伝承一覧〕」『日本文学文化』1: 2-18.
- 佐藤友哉, 2009, 「デンデラ」『新潮』106 (1): 6-192.
- 関敬吾, 1966, 「姥捨山考」『昔話と笑話』岩崎美術社: 1-7.
- Serre-Monteil, Claudine, 1999, *Les amants de la liberté: l'aventure de Jean-Paul Sartre et Simone de Beauvoir dans le siècle*, Paris: Hachette. (= 2005 門田真知子・南知子訳『世紀の恋人・ボーヴォワールとサルトル』藤原書店.)
- Singer, Barnett, 2006, *Brigitte Bardot A Biography*, North Carolina: McFarland & Company, Inc., Publishers.
- 鈴木道彦, 1984, 「『別れの儀式』シモーヌ・ド・ボーヴォワール著 朝吹三吉・二宮フサ・海老坂武訳——サルトルの惨憺たる老いを描く愛情の筆に脱帽」『朝日ジャーナル』26 (12): 73-75.
- 谷崎潤一郎, 1968, 『鍵・瘋癲老人日記』新潮文庫.
- 立川信子, 2014, 「シモーヌ・ド・ボーヴォワールの『老い』についての考察—作家の創作をめぐる』『愛媛大学法文学部論集. 人文学科編』36: 1-18.
- Толстой, Лев Николаевич, 1886, *Смерть Ивана Ильича* Москва: Изд. "Посредник". (= 2006 望月哲男訳『イワン・イリイチの死』『イワンイリイチの死／クロイチェル・ソナタ』光文社古典新約文庫: 7-138.)
- Verlhac, Pierre-Henri, 2008, *Clint Eastwood—A Life in Pictures*, San Francisco: Chronicle Books.
- Vincendeau, Ginette, 2014, *Brigitte Bardot: The Life, The Legend, The Movies*, London: Carlton Books.
- Wallis, Velma, 1993, *Two old women: an Alaska legend of betrayal, courage and survival*, Seattle: Epicenter Press. (= 1995 亀井よし子訳『ふたりの老女』草思社.)
- 山田弘明, 2005, 「『老い』と西洋思想」『名古屋大学哲学論集』7: 1-13.
- 柳田國男, 1998, 「親棄山 (『村と学童』所収)」『柳田國男全集第十四巻』筑摩書房: 481-492.

Visualizing “Old Age” and the “Death of the First Person” : Rereading Simone de Beauvoir’s *Old Age*

Yoko SASAKI

The road from “old age” to “death” is one that nearly all of us must travel. Youth is a privileged period of time when one can disregard old age and the death of the first person. The young look toward a time in the future, while the old look back at the past. Recently, Beauvoir’s *Old Age* has been republished as a special Japanese translation, almost 40 years after its original publication. *Old Age* is a book that is rich in research on “old age” that is both diachronic and synchronic. It presents a panoramic view of “old age” through Beauvoir’s knowledge of ethnic studies, literature, social studies, and cultural anthropology. Loneliness and anxiety, which come with old age, causes an individual to pose an existential question about human existence causing them to further denounce different conditions of “old age” that depend on an individual’s circumstances, such as class. The glorification of youth in modern society can be interpreted as covering up “old age” and can even overshadow the death of the first person. The social preoccupation with youth makes the reexamination of “old age” all the more valuable. This study will also examine tales of elderly abandonment (kiro monogatari) through the examination of “old age.”

Key Words: old age, time, appearance, youth, death